

上代・中古の「や」について

日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究 第8回研究発表会
於 国立国語研究所 講堂

金水 敏・山田昇平
(大阪大学大学院文学研究科)

1. 導入

- ・ 取り扱う資料：万葉集 (7-8 世紀)、古今和歌集 (905 年)、落窪物語 (10 世紀末?)
- ・ 発表の目標：焦点の観点から係助詞「か」と「や」の相違について検討する。

2. 上代・中古の「か」と「や」の昨日

- (1) か:
- a. [... XP-か ... (連体形)] = (疑問詞/肯否) 疑問文 ← 係り結び
 - b. [... 連体形]-か = ((疑問詞)/肯否) 疑問文 ← 文末用法
 - c. (NP-は) NP-か = (肯否) 疑問文 ← コピュラ用法
- (2) や:
- a. [...XP-や ... (連体形)] = (肯否) 疑問文 ← 文末用法
 - b. [... (終止形)]-や = (肯否) 疑問文 ← 文末用法
 - c. [... (已然形)]-や = (肯否) 疑問文 ← 文末用法
 - cf. NP-や *wh* = (*wh*) interrogative?
- ここにありて筑紫やいづち白雲のたなびく山の方にしあるらし (04/0574H01)
此間在而 筑紫也何處 白雲乃 棚引山之 方西有良思
- (3) ぞ (そ):
- a. [...*wh*-ぞ ... (連体形)] = (疑問詞) 疑問文 ← 係り結び
 - b. [... XP-ぞ ... (連体形)] = 平叙文 ← 係り結び
 - c. [... (連体形)]-ぞ = 平叙文 ← 文末用法
 - d. (NP-は) NP-ぞ = 平叙文 ← コピュラ用法
- (4) こそ:
- a. [... XP-こそ ... (已然形)] = 平叙文 ← 係り結び
 - b. [... (連用形)]-こそ = 平叙文 ← 文末用法
- (5) 係助詞なしの *Wh* 句
- [... *wh* ... (終止形?/連体形?)] = (疑問詞) 疑問文 ← 係り結び

3. 焦点化と係助詞

表1 焦点タイプと主語への焦点標識の出現可能性 (下地 2015)

	対比焦点	WH 応答焦点	WH 焦点
宮古伊良部	D/D	D/D	D/D
与那国	D/D	D/D	(D/D)
奄美 (湯湾)	D/D	D/	
奄美 (浦)	D/D		

D は焦点標識、動詞述語文/非動詞述語文

表2 中央語における焦点標識の歴史的変遷 (試論)

	対比焦点	WH 応答焦点	WH 焦点
上代	こそ (ぞ) / か	? /	/ か (ぞ)
中古	こそ (ぞ) / (や)	ぞ? /	/ (か) (ぞ)
中世前期	こそ (ぞ) / (や)	ぞ? /	/ (ぞ)
中世後期	(が) / (が)	(が) /	/ (が)
近世	(が) / (が)	(が) /	/ (が)

平叙文／疑問文

4. 係り結び構文の構造についての仮説

- (6) 仮説 1: 名詞化構文は名詞の用法を基盤として発達する。
- (7) 名詞化構文の一つの基盤としての倒置指定文 (または疑似分裂文)
(cf. 上林 1988; 西山 2003; 金水 2015b)
- (8) 委員長は田中さんだ。(現代日本語)
- (9) 「個体の集合 (定名詞句)」は (総記的な) 個体のリスト
旧情報 新情報 (=焦点)
- (10) 防人に行くは誰が背と問ふ人を見るが羨しさ物思ひもせず (M20/4425)
佐伎毛利爾 由久波多我世登 刀布比登乎 美流我登毛之佐 毛乃母比毛世受
- (11) 玉かつま逢はむと言ふは誰れなるか逢へる時さへ面隠しする (M12/2916)
玉勝間 相登云者 誰有香 相有時左倍 面隠為
- (12) 拡張された倒置指定文としてのノダ文と係り結び構文
- (13) A: 田中さんがいないね。
B: 風邪を引いたんだ。 (Cf. 野田 1997)
- (14) 「命題の集合」 TOP (総記的な) 命題のリスト
旧情報 (=“課題”) 新情報 (=焦点)
→ “課題” はしばしば文脈から語用論的に構築される。
- (15) 吹き鳴せる 小角の音も [一云 笛の音は] 敵見たる 虎か吼ゆると諸人の おびゆるまでに (M2/199)
吹響流 小角乃音母 敵見有 虎可 S 吼登 諸人之 協流麻 R 尔

5. 「か」と「や」の位置

- (16) 仮説 2: 「か」は焦点または“近似焦点”の一つに置かれるが、「や」はそうではない。(cf. 野村 2002, 衣畑 2014b)
- (17) 近似焦点: 正確な意味での文の論理的な焦点ではないが、文中の新情報を構成する要素。
- (18) 朝霞たなびく野辺にあしひきの山霍公鳥いつか来鳴かむ (M10/1940) 疑問詞 → 焦点位置
朝霞 棚引野邊 足桧木乃 山霍公鳥 何時来将鳴
- (19) 「いかにして恋ひば」か妹に武蔵野のうけらが花の色に出ずあらむ (M14/3376)
疑問詞を含む直接構成素としての句 → 焦点位置
伊可爾思弓 古非波可伊毛爾 武蔵野乃 宇家良我波奈乃 伊呂爾弓受安良牟

cf.

- (20) 我がここだ偲はく知らに[霍公鳥いづへの山を鳴きか越ゆらむ] (M19/4195) → 近似焦点?
吾幾許 斯努波久不知尔 霍公鳥 伊頭敵能山乎 鳴可將超
- (21) 倉橋の山を高みか夜隠りに出で来る月の光乏しき (M03/0290) → 焦点位置
椋橋乃 山乎高可 夜隠尔 出来月乃 光乏寸
- (22) 人皆か 我のみやしかる わくらばに 人とはあるを (M05/0892) → 焦点位置
人皆可 吾耳也之可流 和久良婆爾 比等等波安流乎
- (23) 息の緒に我が思ふ君は鶏が鳴く東の坂を今日か越ゆらむ (M12/3194) → 近似焦点?
氣緒尔 吾念君者 鶏鳴 東方重坂乎 今日可越覽

- (24) 高円の野辺の秋萩いたづらに咲きか散るらむ見る人なし (M02/0231) → 近似焦点?
 高圓之 野邊乃秋芽子 徒 開香將散 見人無尔
- (25) 神からやそこば貴き山からや見が欲しからむ (M17/3985) → 焦点位置
 可牟加良夜 曾許婆多敷刀伎 夜麻可良夜 見我保之加良武
- (26) かの子ろと寝ずやなりなむはだすすき宇良野の山に月片寄るも (M14/3565) → 近似焦点?
 可能古呂等 宿受夜奈里奈牟 波太須酒伎 宇良野乃夜麻爾 都久可多与留母
- (27) 剣大刀身に佩き添ふる大夫や恋といふものを忍びかねてむ (M11/2635) → 主題位置?
 劔刀 身尔佩副流 大夫也 戀云物乎 忍金手武
- (28) 島伝ふ足早の小舟風まもり年はや経なむ逢ふとはなしに (M07/1400) → 主題「は」 + や
 嶋傳 足速乃小舟 風守 年者也經南 相常齒無二
- (29) み吉野の山のあらしの寒けくにはたや今夜も我が独り寝む (M01/0074) → 文副詞「はた」
 見吉野乃 山下風之 寒久尔 為當也今夜毛 我獨宿牟

6. 上代語の「や」の意味／機能とは何か

(30) 大野 (1993):

奈良時代のヤ[...]大事な点は、ヤが疑問詞を承けないことである。ヤは上代では確定的、確信のあることを承ける。そして、その確信を相手につきつける。ヤのこの根本的性格を重く見ることが重要である。(p. 269)

(31) 野村 (2002):

[...]連体形による係り結びは本来カとソによる体制であったものが、カと意味においてよく似たところのあるヤが、何らかの形でカのあるべき場所に交替的に侵入し、次第にその領域を拡大して、ついには疑問語以外の地点からすべてのカを追放したと推定することができる。(p. 32)

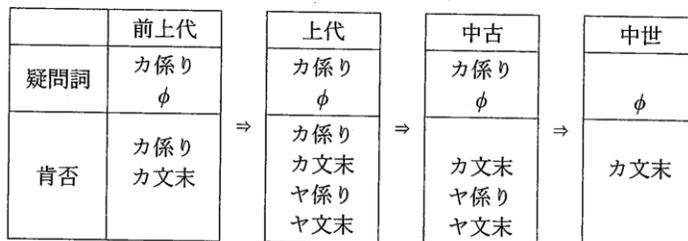


図2 上代以前からの疑問形式の変化

(cf. 衣畑 2014b: 73 図2)

上代のヤによる係り結び文は、内容上次の四種に分類できよう。

- ①疑問 ②問い掛け ③反語 ④不望予想

まず用例を示す。

- ①梅の花散らす春雨いたく降る旅にや君が廬りせるらむ (1918)

梅花 令散春雨 多零 客尔也君之 廬入西留良武

- ②ほととぎす来鳴き響もす卯の花の伴にや来しと問はましものを (1472)

霍公鳥 来鳴令響 宇乃花能 共也来之登 問麻思物乎

- ③這ひ乗りて遊び歩きし世間や常にありける (804)

波比能利提 阿蘇比阿留伎斯 余乃奈迦野 都祢爾阿利家留

- ④美吉野の山のあらしの寒けくにはたや今夜も吾が一人寝む (74) (p. 33)

見吉野乃 山下風之 寒久尔 為當也今夜毛 我獨宿牟

「④不望予想」は、「③反語」が真偽的な問いから価値的な問いに転化したものであろう。「～である

か？ 否。」から「～でよいのか？ 否。」への転換である。そしてこのような場合には、真偽性が問われているわけではないから、ヤに疑問の文焦点が認められるということは、勿論ない。将来に関わる事柄であってもむしろ真実性は高いわけであり、この点で、疑問語に付くカと「不望予想」の多いヤとの違いは、際立っている。(p. 35)

(32) 仮説 3:

- a. 「や」は上代日本語においては焦点標識ではなく、一種の疑問のモダリティ標識である。
- b. 「は」は直接構成素に自由に付加することができる。主題位置にさえ付加できる。

7. 中古の「や」

- (33) 歴史コーパスを利用して中古資料の「や」を調査（山田担当）。今回は、和歌の代表として「古今和歌集、物語の代表として「落窪物語」を取り上げる。
- (34) a. 肯否疑問文から「か」が撤退。もともと「や」は“自由付加”だったのだから、「か」の領域を引き継いだとしても、「や」全体としては“自由付加”に変わりはない（別表参照）。
b. 「～にやあらん」「(形容詞) ～くやあらん」「～ずやあらん」といった述語位置への「や」挿入の表現が特に散文でめだつ。この形式はやがて「～やらん」>「～やら」となって、疑問の補文標識となって行く。
c. 「～にや」「～くや」「～ずや」等で終わる句も多い。
d. 注釈的挿入句としての用法も目立つ。
- (35) 『例の腹立てよ』と言ひつるは、さきざきわが腹立つを聞きたるにやあらむ、語りにけるにやあらむと、いとねたし。(落窪、97頁)
- (36) 月影にわが身をかふるものならばつれなき人もあはれとや見む(古今、602番)
- (37) 「これまゐれ」と、女君にまゐりたまへど、恥ぢてまゐらず。いと実法に三つ食ひて、「蔵人の少将もかくや食ひし」とのたまへば、「さこそは」と言ひてみたり。(落窪、66)
- (38) 「いで、そらごとにこそあらめ」と言へど、取りて往ぬ。君いとつれづれなる折にて、見たまうて、「絵や聞こえつる」とのたまへば、「帯刀がもとに、しかしか言ひてはべりつるを、御覧じつけけるにはべるめり」と言へば、「うたて。心無しと見えられたるやうにこそ。(落窪、33)

8. 結論

- (39) a. 上代文献において、「か」が付加された構成素は広い意味で焦点（焦点または近似焦点）と言えるが、「や」は必ずしも焦点に付加されるのではない。前提部に付加されることもあり、この意味では「や」の付加位置は“自由”である。
b. 中古になって「か」は疑問詞疑問文に限定され、さらに必ずしも疑問詞（を含む節）に「か」が付加されるとは限らなくなる。肯否疑問文の「か」は「や」に置き換えられることとなるが、「や」全体としては“自由付加”のままである。また「～にや」「～やらん」などモダリティ形式に近付いていく。

参考文献

- Aldridge, Edith (2015) “Wh-word positions in Old Japanese,” 「上代日本語における疑問詞の位置について」『国語研プロジェクトレビュー』5-3: 122-134, 国立国語研究所。
- 上林洋二 (1988) 「措定文と指定文：ハとガの一面」『筑波大学文藝言語研究・言語編』14: 57-74.
- 金水 敏 (2015a) 「日本語疑問文の歴史素描」『国語研プロジェクトレビュー』5-3: 108-121, 国立国語研究所。
- 金水 敏 (2015b) 「「変項名詞句」の意味解釈について」『日中言語研究と日本語教育』第8号, pp. 1-11, 日中言語研究と日本語教育研究会。
- 金水敏、高山善行、衣畑智秀、岡崎友子 (2011) 『文法史』シリーズ日本語史 3, 岩波書店。
- 衣畑智秀 (2014a) 「係り結びがもたらす疑問助詞の分布制約——日本語史と琉球語から——」『日本言語学会第148回大会予稿集』212-217, 日本言語学会。
- 衣畑智秀 (2014b) 「日本語疑問文の歴史変化—上代から中世—」青木博史・小柳智一・高山善行（編）『日本語文法史研究2』61-80, ひつじ書房。

Satoshi Kinsui, Session 2 (December 19th)

- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論：指示的名詞句と非指示的名詞句』 ひつじ書房.
- 野田春美 (1997) 『(ノ)ダの機能』 くろしお出版.
- 野村剛史 (2002) 「連体形による係り結びの展開」上田博人 (編) 『日本語学と言語教育』 シリーズ言語科学 5, 東京大学出版会.
- 野村剛史 (2011) 『話し言葉の日本史』 吉川弘文館.
- 大野 晋 (1993) 『係り結びの研究』 岩波書店.
- 阪倉篤義 (1993) 『日本語表現の流れ』 岩波書店.
- 下地理則 (2015) 「焦点化と格表示」 『日本言語学会第 151 回大会 予稿集』 396-401、日本言語学会.